

子どもの歌の日独比較

羽根田 真 弓

Mayumi HANEDA : A Comparative Look at Children's Songs in Japan and Germany

幼稚園でうたわれる子どもの歌を日本とドイツで比較した場合、伴奏形態に根本的な相違がある。

わが国では、従来子どもの歌のほとんどがピアノ伴奏を伴って創作されてきた。そのため、保育の現場ではピアノ伴奏によってうたわれている。一方、ドイツの幼稚園では子どもの歌がピアノ伴奏によってうたわれることは皆無に近い。これら伴奏形態によって、子どもの歌および表現活動にそれぞれ特徴が表れている。

さらに、ピアノを重視するか否かの保育環境の相違は、子どもの歌の表現活動に影響を及ぼしている。また、子どもの歌のピアノ伴奏形態は、わが国の保育者養成における音楽教育がピアノに偏向する要因となっている。

キーワード：ピアノ伴奏 保育環境の相違 ピアノ優先 芸術的作品 人間形成

1. はじめに

筆者は、従来保育者養成における音楽教育をドイツとの比較検討によって追究してきた¹⁾。そして、この比較による根本的な相違点とは、養成課程においてピアノが重視されているか否かである。そのため、わが国ではピアノが不可欠となっており、ピアノなど器楽による伴奏のための音楽知識および技能習得が必修化され、伝統的な教育実践となっている。

確かに、わが国の保育の現場で子どもたちによってうたわれる歌の多くは、ピアノの伴奏形態がとられており、ピアノ伴奏は必要不可欠となっている。これらの結果として、子どもの歌がピアノ伴奏に対して従属的關係になってきたことが示唆できる。つまり、ピアノによる伴奏が子どもの歌よりも優先される傾向にある実態を指摘するものである。

そこで、筆者は、ピアノを重視するか否かの保育

環境の相違は、子どもたちの歌の表現活動にも影響を及ぼしているものと考え。そのために、本稿では日本とドイツの子どもの歌の比較分析を行い、伴奏形態および保育者の子どもの歌への関わりが子どもの歌にどのように影響を及ぼしているのか、保育者養成における音楽教育の関わりとして検討する。

2. 方 法

日本とドイツの幼稚園において子どもたちの愛唱歌を調査し、それぞれ選出された歌の比較を行った。さらに、保育の現場で活用されている子どもの歌のテキストをそれぞれ選定し、比較分析を行った。調査を行った時期は、2002年6月である。

事例とする幼稚園と選出された歌、および分析に用いたテキストは次のとおりである。なお、事例1)のテキストは鳥取短期大学幼児教育学科で使用するテキストであり、事例2)のテキストは事例2)の幼稚園によって推薦されたテキストである。

事例1) 鳥取短期大学附属幼稚園

《おなかのへるうた》

(阪田寛夫作詞・大中恩作曲)

《おつかいありさん》

(関根栄一作詞・團伊玖磨作曲)

《おばけなんてないさ》

(楨みのり作詞・峯陽作曲)

《ありさんのおはなし》

(都築益世作詞・渡辺茂作曲)

《南の島のハメハメハ大王》

(伊藤アキラ作詞・森田公一作曲)

《おおきな古時計》(保富康午作詞・ワーク作曲)

〈テキスト〉

幼児の歌110曲集²⁾

事例2) St. Martin Kindergarten/Heidelberg近郊

“Ich sage dir Guten Morgen” ³⁾

(Text Psalm 139, 5 Musik Ernst Richter)

“Ich kenne einen Garten” ⁴⁾

(Klaus W Hoffmann/Ulrich Tuerk)

“Wie schoen, dass Du geboren bist” ⁵⁾

(Musik u. Text Rolf Zuckowski)

“Ich schenke dir einen Regenbogen” ⁶⁾“Vom Anfang bis zum Ende” ⁷⁾“Wir werden immer groesser” ⁸⁾

〈テキスト〉

KINDERLIEDER ZUM EINSTEIGEN UND AB-
FAHREN ⁹⁾Wolfgang Hering, Bernd Meyerholz/Voggenre-
iter Verlag

3. 要 旨

まず明確な相違点として伴奏形態が目目できる。

事例1)のテキストは、わが国の子どもの歌のほとんどがそうであるようにすべての歌がピアノ伴奏を伴っている。一方、事例2)のテキストはピアノ伴奏ではない。単にコードネームが記されているのみであり、ギター伴奏のタブレターが示されてい

る。これはドイツの最も一般的な形態であり、したがってピアノ伴奏を伴う子どもの歌のテキストは皆無に近い。

この相違は、それぞれの保育者養成機関における音楽教育の実態¹⁰⁾と一致しており、保育の現場において子どもの歌の伴奏がピアノにほぼ固定されているわが国と、ギターが最も一般的であり、様々な楽器が用いられるドイツの保育環境を明確に表している。

このようにピアノと密着した関係にある日本の子どもの歌は、ピアノ伴奏を伴うことによってリズム本位的な歌が多いことが窺える。実際、テキストに見る子どもの歌は、新しい歌ほどリズムカルな歌が目立ち、伴奏も技術的に要求されているものが多い。

その反面、ドイツの子どもの歌はシンプルなりズムと単純な構成の歌が多く見られ、和声も実に実用的である。

さらに、アウフタクトにも着目することができる。事例2)のテキスト(全66曲)にはアウフタクトの曲が圧倒的に多く、全体の6割を占めている。一方の『幼児の歌110曲集』ではアウフタクトの歌は14曲であるものの、その半分は外国曲である。したがって、ドイツの子どもの歌にはアウフタクトが目立っている。

拍子は、ドイツのテキストでは4拍子がおよそ8割を占めており注目できるが、意外にも3拍子は雪を扱った民謡のわずか1曲である。また、8分の6拍子は4曲であった。そして、『幼児の歌110曲集』では半数が4拍子であり、2拍子も非常に多い。そして、3拍子は外国曲1曲を含む8曲であり、8分の6拍子は1曲であった。

調号は、ドイツのテキストでは半数がC Durであり、D Dur, E Durの曲も多く見られる。一方、『幼児の歌110曲集』ではF Durが最も多く、続いてC DurとD Durが多い。F Durの曲はドイツのテキストではわずか2曲であった。また、mollの曲では、ドイツのテキストには9曲、『子どもの歌110曲

集』には8曲が扱われているが、比率ではドイツのほうが高い。

音程では、両者の大きな相違は見られなかったが、ドイツの子どもの歌では2度音程、3度音程が圧倒的に目立っている。

選出された歌にみる特徴として、やはりドイツの子どもたちによってうたわれる歌は、日本の子どもたちによってうたわれる歌よりもリズムがきわめて平易で単純である。それぞれの音符の長さの割合が日本の子どもたちの愛唱歌よりも長く、付点はわずかである。

また、6曲のうち5曲がアウフタクトであり、和声は単純である。さらに、歌詞の内容は行儀よく、子どもたちの日常生活のお手本がうたわれている。

その反面、今回、昭和に誕生した現代の子どもの歌が中心となって選出された日本の子どもの歌は、ドイツの子どもの歌と比較してリズムが非常に複雑である。音符の長さの割合は短く、付点のリズムが目立ち、3連音符もかなり多く見られる。歌詞は、新しい子どもの歌の特徴の一つでもあるように子どもの生活に根ざした、子どものことばでうたわれており、何よりもユニークな内容となっている。したがって、リズムおよび和声のみならず、歌詞においてもドイツの子どもの歌と大きな相違が見られる。

このように比較すると、日本の子どもの歌はドイツの子どもの歌よりも特にリズムが複雑であり、これらはピアノ伴奏によって導かれている。一方、ドイツの子どもの歌は平易なものが多く、和声および歌の構成が単純で容易であることが窺われる。そして、これらの歌はギター伴奏を伴っている。

4. 考 察

子どもの歌の日独比較において、伴奏形態が根本的に異なり、わが国の子どもの歌とピアノ伴奏との密着した関係が強調できる。と同時に、私たちはこの実態をどのように受けとめなければならないのか

が問われる。ドイツの幼稚園で子どもたちの歌にピアノ伴奏形態がとられることはまずない。事例2)においてもこのことが確認できる。

そこで、子どもの歌がピアノ伴奏を伴うたわが国の子どもの歌の伝統的な実践方法が考えられる。さらに、明治の近代化とともに学校唱歌から始まったわが国の子どもの歌は、ピアノ伴奏とともにその歴史があるといっても過言ではなく、つまり、鍵盤楽器の伴奏とともに学校唱歌はうたわれ、音楽教育が普及したのである。そして、大正の童謡時代および昭和の新しい子どもの歌の誕生にしてもほとんどの歌はピアノ伴奏を伴って創作されている。このように、子どもの歌がピアノ伴奏とともに誕生してきた歴史的事実は他の国には例がないと思われる。

しかも、ピアノ伴奏とともに創作された子どもの歌であることによって、ピアノが必要とされてきたのは当然である。この結果として、ピアノはわが国では学校教育および保育環境のための重要な楽器となった。そして、今回の比較結果として示されるように、ピアノ伴奏を伴う子どもの歌はわが国の独特な特徴である。したがって、伴奏形態にともなう保育環境の相違は、子どもの歌の表現活動にもそれぞれ影響を及ぼしているものと考えられる。

事例1)で示される子どもの歌はいずれもピアノ伴奏を伴っている。ところが、子どもの歌がピアノ伴奏を伴うものであるという固定概念については、保育の現場においても、また保育者養成のための音楽教育においてもこれまで検討されてはこなかった。

実際、この固定概念によって、養成課程では依然としてピアノ伴奏技術の向上を求めるための模索がなされており、同時に、保育の現場からも求められている。にもかかわらず、事例1)では子どもの愛唱歌として新しい子どもの歌がおもに選出され、これらはいずれも芸術的作品であり、伴奏譜も芸術的伴奏である。現実として、これらの伴奏をするには、今日の保育者養成課程ではかなり困難である。ここに、わが国において子どもの歌がピアノ伴奏に

よってうたわれる一つの問題点を見出すことができる。そのため、子どもの歌がピアノ伴奏によって固定されている実態は、保育者の伴奏技術の向上をますます求めるものと考えられる。

さらに、わが国の子どもの歌がピアノ伴奏を伴って創作され、さらに保育環境としてピアノが設置される場合、より躍動感溢れるリズムや軽快なリズムが求められてリズム本位的な歌になりやすく、さらに複雑化していく傾向になる問題が考えられる。加えて、子どもたちを取り囲む環境も変化しつつ、蔓延しているマスコミの歌として子どもたちの歌にも時代の変化は確実に表れている。

そして、子どもの歌がピアノ伴奏形態であることによって、ピアノ伴奏が優先される傾向が強くなっており、ピアノ伴奏に対して子どもの歌が従属的関係にあることが指摘できる。その結果、ピアノ伴奏が先行し、子どもの表現活動にもその影響が表れやすくなり、ともすれば、リズム本位的な歌によって、子どもたちの躍動的な表出行動が目立ち、ことばの存在が欠けてしまうことが指摘できる。

伝統的なピアノ伴奏もそれぞれが芸術作品であるがゆえに、ピアノ伴奏が必要であるという概念から離れられないこともあるが、しかし、子どもの歌がピアノ伴奏ではなく、他の形態方法を伴って創作されたり、保育現場においてもピアノに固執することなく幅広い子どもの歌の実践方法を想定する必要があるのではなかろうか。

さらに、上述したように、保育者にとってもこれらの伴奏は容易ではなく、子どもの歌よりピアノ伴奏にエネルギーが費やされなければならない現状を改善するためにも、筆者は、このようなピアノ伴奏に付随した傾向にある日本の子どもの歌について、その検討が必要であると考え、つまり、問題の所在は、子どもの歌にピアノ伴奏が浸透している日本の現状にある。

さて、事例2)の幼稚園ではドイツのほとんどの幼稚園がそうであるように、保育環境としてピアノは設定されていない。子どもたちの歌の表現活動に

は伴奏楽器はほとんど用いられず、子どもたちと保育者によって展開されている。その形態とは、子どもたちは円陣になって椅子に座り (Stuhlkreis)、保育者の話しかけや歌いかけによってうたっている。この場合、指遊びや手遊びを伴うことが多く、日本の子どもたちの歌の表現活動と比較すると素朴にさえ受けとめられる。ところが、ピアノ伴奏形態によってリズムが複雑化し、行動が表出している傾向にある日本の子どもの歌と異なり、リズムが極めて単純であり、平易である理由が考えられるものの、そのためにことばが子どもたちによって大切にうたわれている。この間、子どもたちと保育者の距離はごく近く、子どもたちの一人ひとりの個性が尊重されていることが観察できる。また、単純な内容および構成である子どもの歌によって、子どもたちの歌による表現活動がより助長されていることが確認できる。

このように伴奏形態の相違によって、ピアノ伴奏形態によってリズムが先行しやすい子どもの歌と、ピアノ伴奏を伴うことなく平易なリズムおよび構成によって、旋律的な子どもの歌に区別することができる。

リズム本位的な歌による子どもたちの表現活動は、表出的な行動が目立ち、うたうことによって助長される思考力、想像力およびイメージが損ねられるリスクを背負っているものと考えられる。一方では、伴奏に支配されることがないためにことばが大切にされ、子どもの表現活動が効果的に促される効果が考えられる。

さらに、ピアノ伴奏形態によって考えられる問題はこれだけではない。わが国の幼稚園の1クラスの子どもの人数はドイツと比較するとおよそ2倍であり、子どもたちの歌の表現活動は必然的にピアノ伴奏による一斉歌唱の形態をとりやすくなる。協調性を重要視してきた日本の教育理念ではあるものの、この場合、確かにピアノによる伴奏は他の楽器よりも効果的ではあるが、子どもたちの表現活動は集団としてのアピールにとどまりやすく、元気さのみを

強調する独特な活動にとどまっている。この活動では、子どもの個性が育まれることは困難であり、乱暴な表現活動が目立っている。

加えて、日本人の2拍子性を子どもたちに強制しかねないスタイルを作り出し、特に、下拍を(crusis)を強調したりリズム感を与えてしまっている。この実態からも、クラス編成の人数によって、ピアノ伴奏が維持されており、伴奏形態との関連を示唆することができる。10数人のグループ編成によるドイツの子どもたちの歌の表現活動には、ピアノ伴奏形態は当然ながら考えられないことであろう。

このように、ピアノ伴奏が優先されている現状をわたしたちは切実に受けとめる必要がある。なぜなら、子どもの歌がピアノ伴奏にエネルギーを費やしすぎる現状では、保育者と子どもが歌のこころを共有することはできないからである。

それは、保育者が子どもの歌を一方向的にピアノ伴奏で教えようとしていることではなかろうか。つまり、保育者が介入することなく、子どもとピアノとの表現活動になりかねない。子どもの人間形成を助長するための歌であれば、ピアノ伴奏そのものではなく保育者がいかに子どもたちを導くのが問われなければならない。

ピアノ伴奏が子どもの歌の単なる合図ではなく、伴奏だけが先行するものではない。つまり、わが国ではピアノ伴奏が子どもたちの歌の表現活動を支配していると考えられる。そのために、保育者養成ではピアノ伴奏のための音楽教育ではなく、子どもの歌が主軸となる教育内容への改善が求められなければならない。

ドイツの子どもたちの歌が、日本の子どもたちの歌と比較して平易であることは述べた。もう一つの大きな相違点はアウフタクトであり、事例2)の愛唱歌およびテキストには圧倒的にアウフタクトの歌が多いことが注目できる。また、他のテキストによっても同様に確認できる。

これは、ドイツ語が冠詞や代名詞および疑問詞などアクセントのないシラブルで始まる場合、第2シ

ラブルがアクセントとなるドイツ語の特徴によるものである。したがって、事例2)の愛唱歌およびテキストにおいてもこの関係が確認される。このために、ドイツでは就学前の子どもたちの歌は容易なメロディと歌詞になるように配慮されている。

ドイツ語の特徴に起因しているとはいえ、子どもの歌が容易なメロディと歌詞であることは子どもにとっても受け入れやすい。同時に、子どもがうたいやすいことは、子どもの表現活動がより効果的に促される。加えて、繰り返しを好む子どもの特性を考慮すれば、子どもの歌が容易であればあるほど歌としての表現活動が活発になることは明らかであろう。

さらに、アウフタクトによってより音楽的な流れを感じることができる。そのため、リズムが先行している日本の子どもたちの歌よりも旋律的であり、子どもたちの感覚にうったえやすいことが考えられる。そのため、下拍を強調するような子どもたちの表現活動は見られないのである。

また、歌詞においても相違が見られた。事例2)の幼稚園が教会運営ということもあり、宗教的な歌が2曲含まれていることと、ドイツ語との関連によってわかりやすい内容のドイツの子どもたちの歌に対して、事例1)ではユニークな内容であった。これは、これらの作品が誕生した時代背景において、子どもたちの歌の創作に携わった作詞者および作曲者の意図するところである。ドイツの伝統的な民謡(Volkslied)には、物語的な内容の歌詞や道徳的とも言える歌詞が多く、他の一般的な子どもの歌にしても、このような歌はないと思われる。

さて、子どもの歌は人間形成の基礎が培われる幼児期に重要な意義を持つものである。その人間形成とは子どもたちがいかに自己表現を見出していくのか、この過程において歌は他のどのような方法論よりも子どもたちの表現活動を助長するものである。その歌とは、ことばであり、またメロディでもある。また、リズムによっても子どもたちの活動を促し、ハーモニーにしてもより子どもたちのイメージ

を豊かに育むことができる。

この子どもたちの歌の表現活動を助長するためには、ピアノ伴奏ではなく保育者の子どもへの関わりが重要である。そのための保育者の音楽性とはピアノ伴奏のための技術のみではなく、子どもへの指導性ではなかろうか。ピアノ伴奏を伴わないドイツの子どもたちの活動形態は、子どもと保育者の密接な関わりのもとにあり、子どもたちの個性を育み、歌による表現の助長が十分になされていた。

本稿では、子どもの歌の日独比較によってわが国ではピアノ伴奏が先行している現状を指摘した。この実態を保育者養成においてどのように改善していかなければならないのか。ピアノを想定しない保育および保育者養成のための音楽教育を実践することは可能であろうか。そして、再検討が迫られる最も重要な課題とは、本来の子どもの歌の意義である。さらに、子どもたちはかつてないほどの喧騒と騒音の音楽環境に囲まれているのである。子どもたちは、初めは自分で歌を選ぶことができない。子どもの歌について新たな見解の必要性を強調する。

5. おわりに

わが国の子どもの歌がピアノ伴奏に固定されている実態を提示した。しかし、この芸術的ピアノ伴奏を否定するものではない。他の国々に例をみない芸術としての子どもの歌を、今後、いかに子どもたちに提供していかなければならないのか、その方法論についてさらに討究したい。

付記

本稿は、全国大学音楽教育学会第18回大会（平成14年10月12日）において発表した内容をまとめたものである。

註

- 1) 羽根田真弓「保育者養成における音楽教育の関わり～ドイツの事例をもとに～」『全国大学音楽

教育学会研究紀要第12号』2001年 64—73頁

2) エー・ティ・エヌ

3) Ich sage dir Guten Morgen

1. Ich sag dir Guten Morgen und lach dir freundlich zu Dann sagst du Guten Morgen genau wie ich es tu'
2. Ich sag die Guten Morgen und winke noch dazu Dann winkst du heute morgen genau wie ich es tu'
3. Ich sag dir Guten Morgen und nicke noch dazu Dann nickst du heute morgen genau wie ich es tu'
4. Ich sag dir Guten Morgen und streichle dich dazu Dann streichelst mich heute morgen genau wie ich es tu'
5. Ich sag die Guten Morgen und druecke dich dazu Du drueckst mich heute morgen genau wie ich es tu'
6. Ich sag dir Guten Morgen und kitzle dich dazu Du kitzlst mich heute morgen genau wie ich es tu'
7. Gott schenkt uns diesen Morgen weil er uns gerne mag

Wir danken fuer den Morgen und bitten fuer den Tag

（訳は筆者による。以下、同様）

おはよう

1. おはようと言って微笑みかけたら そしたらあなたもおはようと言った
2. おはようと言ってウインクしたら そしたらあなたもウインクしたよ

3. おはようと言ってうなずいたら そしたらあ
なたもうなずいた
4. おはようと言ってなでたら そしたらあなた
もわたしをなでた
5. おはようと言って押したら そしたらあなた
もわたしを押した
6. おはようと言ってくすぐったら そしたらあ
なたもわたしをくすぐった
7. かみさまがおあたえくださった あさにおい
のりします

4) Ich kenne einen Garten



Ich kenne einen Garten mit Teich und Haus da
tummeln sich die Kinder tagein, tagaus

Ja, was mag das fuer ein Garten sein? Ein ganz
besond'rer Garten mussdassein.

Im Garten wachsen Baeume, ein Brombeer-
strauchGemuese, Seete, Blumen, die gibt's da
auch. Du was mag das fuer ein Garten sein?

Hhm, ein ganz besond'rer Garten muss das sein.
Denn im Garten, den ich mein', da waechst
ganzviel.

Der Mut zu mancher Freundschaft und Spass
am piel. Ach, was mag das fuer ein Garten
sein? Ein ganz besond'rer muss das sein.

Doch das ist nicht alles, da waechst zum Glueck
Ein jedes Kind pro Woche ein kleines Stueck.

Ja, Mann, was mag das fuer ein Garten sein?

Hhm, ein ganz beson'rer Garten muss das sein.

Du sag: was kann das wohl fuer'n Garten
sein? Na Mensch, das kann doch nur'n Kinder-
garten sen.

お庭

- 池とおうちがある庭をしってるよ
そこでこどもたちが毎日跳ね回っているよ
これはいったいどんなお庭でしょう
それは特別なお庭だよ
お庭で木が大きくなって、ブラックベリー、野菜、
花畑もあるよ
これはいったいどんなお庭でしょう
それは特別なお庭だよ
お庭で楽しくあそぶよ
これはいったいどんなお庭でしょう
それは特別なお庭だよ
それだけじゃないよ
どの子もみんな大きくなるよ
これはいったいどんなお庭でしょう
それは特別なお庭だよ
ねえ、どんなお庭でしょう
それは幼稚園だよ

5) Wie shcoen, dass Du geboren bist



Heute kann es regnen, stuermen oder schnei'n
Denn Du strahlst ja selber wie der Sonnen-
schein.

Heut' ist Dein Geburtstag, darum feiern wir.

Alle Deine Freunde freuen sich mit Dir.

Refrain;

Wie schoen, dass Du geboren bist,

wir haetten Dich sonst sehr vermisst.

Wie schoen, dass wir beisammen sind.

Wir gratulieren Dir, Geburtstagskind !

お誕生日おめでとう

きょうは雨かもしれない 嵐かもしれない

雪かもしれない

でも 太陽のようにきみは光り輝いている

きょうはお誕生日おめでとう

みんなでおいわいしよう

(繰り返し)

きみがうまれたのはすてきだ きみがいてうれし
いな

いっしょにあつまって さあおいわいしよう

6) Ich schenke dir einen Regenbogen

Text und Melodie:
Dorothea Kreuzsch-
midt



Ich schenke dir 100 Seifenblasen sie spielen
mein Gesicht

Ich wuensche dir was ! Was ist den das ? Nein
-ich verrats dir nicht !

Ich schenke dir eine weisse Wolke hoch am
Himmel dort

Ich wuensche dir as ! Was ist denn das ? Es ist
ein Zauberwort.

Ich schenke dir einen Kieselstein, denn ich am
Wege fand

Ich wuemsche dir was ! Ich schreibe in deine-
Hand.

Ich schenke dir einen Luftballon, er schwebt
ganz leicht empor.

Ich wuensche dir was ! Was ist denn das ?

Ich sage dir leis ins Ohr !

Ich schneke dir ein Kuchenherz, darauf steht:
"Ich mag dichso !"

Ich wuensche dir was ! Jetzt weisst du's sowi-
eso !

虹のプレゼント

ぼくの顔がうつってる100個のしゃぼんだまをプ
レゼントしよう

いいことがありますように それはひみつだよ

お空に浮かんた白い雲をプレゼントしよう

いいことがありますように それはおまじないだ
よ

道で見つけた小石をプレゼントしよう

いいことがありますように それをあなたの手に
かくよ

ふわふわ浮かぶ風船をプレゼントしよう

いいことがありますように 小さく耳にささやく
よ

「だいすき」とかいたハートのケーキをプレゼン
トしよう

いいことがありますように もうわかったでしょ

7) Vom Anfang bis zum Ende



Vom Anfang bis zum Ende haelt Gott seine
Haende ueber mir und ueber dir

Ja, er hat es versprochen, hat nie sein Wort ge-
brochen: "Glauben mir, ich bin bei dir" immer
und ueberall

immer und ueberall immer bin ich da

余すところなく

余すところなく 神はわたしたちに手をさしのべ

る

神は約束してくださる いつも どこでも わた
したちのそばにいてくださると

8) Wir werden immer groesser

1. Wir werden immer größer, jeden Tag ein Stück. Wir
werden immer größer, das ist ein Glück! Große bleiben
gleich groß oder schrumpeln ein. Wir werden immer
größer ganz von allein

Wir werden immer groesser, jeden Tag ein

Stueck, Wir werden immer groesser, das ist ein
Glueck !

Grosse bleiben gleich gross oder schrumpeln
ein. Wir werden immer groesser ganz von allein.

大きくなるよ

わたしたちは毎日すこしずつおおきくなるよ

うれしいな

大きくなるのか小さくなるのか

わたしたちは一人で大きくなるよ

9) 子どもの歌 出発進行

10) 羽根田真弓「保育者養成課程における音楽教育
の現状と課題～日本とドイツの学生における実態
調査をもとに～」『鳥取短期大学研究紀要第44号』

2001年 49-58頁